

## 一歯欠損の治療戦略

### 多様化する治療選択肢とインプラントを取り巻く環境



吉野 晃  
吉野デンタルクリニック院長

Branemark らにより オッセオインテグレーションが発見されてからすでに50年以上が経過します。無歯顎への応用のみで始まった歯科インプラントの臨床は、新しい技術と概念を加えながら適応拡大を続け欠損補綴の一選択肢としての地位を確立してきました。単独歯欠損においても歯周病学的指標における5年間の経過観察では残存率が100%と報告されており、残存歯数の増加により少数歯欠損が増加した現代歯科医療で自立型補綴装置であるインプラント治療の需要は益々大きくなることが予想されます。

一方で、国民生活センターのプレスリリースに代表されるインプラント治療に対するネガティブな報告も後を絶たしません。学会のトピックスも積極的な適応拡大から「安心・安全」や超高齢社会に準じた「長期安定」に変化しつつあります。

欠損歯列に対する補綴治療の目的は「歯及び周囲組織の欠損から生じる咀嚼・発音機能や審美性の低下を回復し、患者のQOLの改善を図ること」とされています。多様な治療法のなかから一つを選択する臨床判断を求められたとき、インプラント治療は最優先の治療法として選択され得るものなのでしょうか？ただ欠損空間を補填するようなインプラントありきの治療方針は患者をミスリードする可能性があります。一方で他の補綴術式がインプラントと比較し簡便であるということでは決してありません。

歯を喪失したことによる口腔内環境の変化は広く知られています。加齢とともに歯の喪失は増加しますが、年齢の要因よりもむしろ保有歯数の減少が新たな歯の喪失に至ることが報告されています。残念ながら歯科治療は再治療の繰り返しであることが多く、結果的に欠損拡大の負のスパイラルに患者を落とし続けてしまいがちです。介入を必要最小限にとどめ補綴治療によるやり直しのスパイラルに入れないこと、指数関数的に増加する欠損の流れから救うインプラントによる欠損回復は大きな意味があると考えています。

世紀の発見と先人たちの努力の結晶を正しく引き継いでいくために、一歯欠損を通して改めてインプラント治療について考える機会に出来れば幸いです。